

(二) 東日本大学史連絡協議会・西日本大学史担当者会

一九九三年度合同研究部会―東京

昨年、東日本大学史連絡協議会（関東地区大学史連絡協議会は一九九三年五月に改称した。）の呼びかけにより大阪で開催された第一回の合同研究会に続いて、今年一九九三年も合同で研究会を開催することが、東日本と西日本のそれぞれの例会で決定され、このたびは東京で開催の運びとなった。この合同研究会には、当史料室から若山助手と寺西が出席した。

この合同研究会は、十月六日から八日までの三日間、東京において開催され、当日はあいにくの雨模様の天気であったが、参加校は東西あわせて四〇校、参加者数は個人会員も含めて八四名と、前回を上回る盛会であった。

十月六日はまず明治大学に集合し午後二時に開会、続いて講演、午後三時二十分から同大学の展示見学。その後会場を中央大学に移して午後五時から懇親会。翌七日は中央大学において午前十時二十分から講演、午後一時からパネル・ディスカッション。八日は午前十時から東京江戸博物館見学という日程であった。

合同研究部会の初日は、明治大学創立百周年記念大学会館において、明治大学の内河久平・歴史編纂事務室事務長の司会で始まった。はじめに岡野加穂留・明治大学学長の挨拶があり、続いて講演会に移った。「近代史としての大学史」と題して、明治大学の中村雄二郎教授に講演していただいた。この講演会は十月五日から九日まで開催された「明治大学の歴史展」の記念講演会も兼ねていたので、合同研究会参加者以外の来聴者もあり、会場となった五階会議室は満員の盛況であった。

中村先生はまず、大学というものが特殊な「場」であるということ、そして、大学史というものは総花的な記述となり誰にも読まれない記念品となるおそれがあるということを述べられた後、近代史の考察に移られた。日本の大学はヨーロッパの大学と異なり、社会の近代化の産物ととらえることができるので、近代史の中に大学をおいてみることに意味がある、と語られた。そして近代史としての大学史を考える上で、大学史には多様な面から考察を加えることができるということを指摘され、これらの視点を明治大学史に則して説明された。最後に先生は、近代化と近代史と大学史の関係は新しい道をひらくものであり、これからの大学史は歴史の事実を述べるものであって、物語にしても研究論文にしてもいけない、と結ばれた。

この講演を受けて質疑応答が行なわれ、日本の近代化と大学を考える上で、国家とのかかわりを無視することはできない、との意見が出た。

講演終了後、明治大学歴史編纂事務室の鈴木秀幸氏より『明治大学百年史』編纂と「明治大学の歴史展」について配布資料の説明があり、二グループにわかれて「明治大学の歴史展」展示を見学した。展示会場では鈴木氏はか二名の方により展示の説明があったが、どなたも展示の内容、大学の歴史に精通されていて、みごとに解説を披露して下さった。

見学終了後、午後五時から会場を中央大学駿河台記念館五階に移して研修懇談会がもたれた。神奈川大学の沢木武美氏の司会、同志社大学の河野仁昭・社史資料室長の挨拶、明治大学の内河氏の乾杯の音頭により、なかなか雰囲気うちに話もはずみ、散会した時には予定の閉会時間を一時間も越えていた。

二日目は、中央大学駿河台記念館六階において講演とパネル・ディスカッションが行なわれた。まず中央大学の浜松晃氏による開会挨拶があり、続いて中央大学の松崎彰氏の司会により講演会に移った。「大学史と大学史編纂

を語る」と題して、立教大学の寺崎昌男教授に講演していただいた。

寺崎先生は東京大学百年史編纂に携わり、現在は立教大学一二五年史に携わっておられる。先生は、このような大学史担当者による会合が持たれたのは画期的なことであると述べられたあと、これまでの大学史というものがどのようなものであったかを話された。教育史の中で学校史をさす場合、大学史が範中に入っていなかったこと、大学史が歴史研究の分野とみなされていなかったことをあげ、大学史は記念誌的であり、どこから見ても「学問」とはなり得なかったが、戦後、この傾向に変化があらわれ、大学史は教育社会学、教育史の領域での研究対象となってきた、と語られた。そこで現在の問題と課題として、史料整備の重要性の認識と大学史編纂の意味の把握が不可欠である――と述べ、「引用される」沿革史作りを指さねばならない、と話を結ばれた。大学史というものを学問のレベルで考えた聴きごたえのある講演であった。

簡単な質疑応答の後、個々に昼食を取り、午後からパネル・ディスカッションを行なった。

(大学史) パネルディスカッション

パネル・ディスカッションは「大学史資料の収集・保存と活用―年史編纂と資料館の現状―」を統一テーマに掲げ、中央大学の松崎氏の司会、中央大学の中川壽之氏の書記により、日本大学大学史編纂室の近沢昭一氏、神戸女学院史料室の若山晴子助手、神奈川大学大学資料編纂室の入谷秀夫氏の三氏に報告をしていた。

近沢氏は、年史編纂作業の一例として、日本大学百年史編纂業務の現状を発表された。配布資料に従って実務内容を述べられたあと、問題点として、企画

の先行、資料の不足、執筆の遅れをあげられた。

若山助手は、史料室の一例として、現状報告をされた。最近の趨勢として、史料の保存と展示の両立が目立っているが、当史料室では、人員・設備の都合上、生史料の整備と関連情報の提供を専らとしていること、図書館の方が歴史が古く組織も整っており、史書史籍の管理はそちらに一任している状態であること、また史料の解説・分類などをこなすには、かなり専門的な経験者の常任が望まれるが、そういう人材の確保は大変むずかしいことなどを述べられた。

(大学史) パネルディスカッション

入谷氏は、合同研究会開催にあたって前もって調査した「『大学史』編纂・資料保存に関するアンケート」の集計結果を配布資料に則して報告された。

三氏の発表を受けて活発な質疑応答が行なわれ、大学史編纂にはさまざまな問題が伴っていることを改めて認識させられた。史料の保存の仕方と人員の問題が伴っていることがよくわかった。三日目の見学会は自由参加なので、パネルディスカッション後、一応閉会となった。散会の前に司会者から明日の日程の説明と次回の合同研究会の予定が発表された。次回の合同研究会は一九九四年十月五日から七日まで福岡の西南学院において開催される予定である。九州での皆様との再会を楽しみにしている。また、西南学院と言えば、『神戸女学院百年史 総説』を執筆なさった長洋一先生もいらっしゃるということなので、お目にかかれることを願っている。

翌十月八日、帰西の前に、史料室の先輩格として予てから敬服していた横浜のフェリス女学院資料室を訪問し、ま

フェリス女学院資料室

左 中山和子さん 右 横田久子室長

同大学音楽学部図書館で、一九七三年から六年間本学音楽学部図書室に奉職しておられた、手代木俊一氏にもお目にかかった。我々が訪問した時、資料室では、十一月に開催される「フェリス祭」の展示用に、明治・大正期の校舎の模型、中高部の現校舎の模型、山手の丘に建つフェリスの校舎の模型を中心にした写真や図面等のパネルを作成中であった。御多用の折りとお見受けしたが、横田久子・広報資料室長（兼）総務課課長補佐は快くお迎え下さった。展示用のパネルを見せていただき、お話をうかがった。横田氏は永年資料室をとりしきっておられ、史料の扱い方や保存・管理に精通しておられる。永い歴史を持つ学校の資料室だけあって、古い貴重な史料もあり、それがガラスケースの中に見事に展示されていた。史料の保存と展示が両立している資料室であった。

今回の合同研究会の企画・運営にご尽力下さった東日本大学史連絡協議会の幹事校の皆様、またフェリス女学院の皆様、感謝申し上げます。

なお、この研究会二日目のパネル・ディスカッションのための若山助手の下書き草稿を入手することができたので、御参考迄に次稿に掲載する。但し、当日はこの原稿を持参して読み上げたわけではないので、文章表現や展開の仕方に異同があるが、この点は御諒承いただきたい。